五月の指輪

山岡久乃

女二人

若い女二人のアパート住居、それもキャバレーの女となると安閑ひぼてんで真面目に見ようとしない。こんあ時代なのだから、仲には変った女もゐる。

鞄ひとつを抱えて転々とホテルからホテル

を泊り歩いて[ゆく]早川花代子のやうなのも[み]る。一年に三交良人(こと)を変へて、大真面目で四度目の結婚を考へてゐる鳩村玉[枝]のやうな女もなくはない。

大酒呑みも、夜嵐きらかひも、[レビュー]好も、おしるこ狂も、かいしてお尻は軽かった。とりわけも、それが「生」に対して何の見遂しも持[て]ない現代の[若い一面]なのだと云へば云へなこと、さうしなければ生き[ゆけ]ないとりわけの[満足]嘘ではない。

北條恒子と及川朱實の場合はだいぶ事情がちがってゐ[た]。北條恒子はきちんと広務の人[ば]った良人があり、及川朱實にはまだ生れたかりの嬰児がある。

恒子の良人は石川県の片山津温泉の近くにある国立療養所に入って胸の病と闘ってゐ[る]し、及川朱實の子供は神奈川県の山田原在[に]預けられて、小さな母の仕送りを待ってゐる。

彼女たちはどうしても妻は事務員だった。勤